

## 日本救急医学会

### 熱中症および低体温症に関する委員会視察報告書

文責：清水敬樹

日本救急医学会の熱中症および低体温症に関する委員会は、きたる東京 2020 での熱中症対策などの提言目的に今夏、マスギャザリングのイベントでの熱中症対策の視察を行なった。今回が初めての試みであり、歴史的に伝統がある下記 3 イベントを視察した。当委員会は意思決定機関でもなく、これらの視察を踏まえて、コンソーシアムなどから、実行委員会への提言という形で効果的な熱中症対策がなされることを期待する。

#### ■第 21 回につぼんど真ん中祭り（於 名古屋） 視察：清水敬樹 委員長

- ①各会場に WBGT 測定器を設置してそれを NTT 回線を利用して会場のスクリーンやパソコン、スマートフォンなどでリアルタイムに確認可能であった。
- ②打ち水として大砲のような装置を使用して、高いイベント性を保ちながら会場のクーリングが可能であった。
- ③愛知万博以降のマスギャザリングへの医療体制が継続的にブラッシュアップされていた。暑熱下でのイベントではあるが、医療体制が万全であり、また街中でのイベントのため日陰も多く、百貨店など冷房も効いている逃げ場が多いこ

とも熱中症対策には有利な環境ではあった。

④東京オリパラでもデータ収集の要望があり、本イベントでも傷病人などが発生した場合の記入用紙を見せて頂いた。これらは東京オリパラで、各救護所などでの記入用紙のたたき台になり得ると感じた。

#### ■北海道マラソン 2019（於 札幌） 視察：高氏修平 委員、上野哲 外部委員

①救護体制はマラソン参加者 18000 人に対してメディカルスタッフ 772 名（ドクター 23 名，看護師 82 名，救急救命士 73 名，理学療法士 45 名，救急救命士学生 296 名，その他）の体制であった。

②各救護テントは 5km, 20km, 25km, 30km, 35km,40km に設置されており，救急医ならびに看護スタッフが配置，傷病者のトリアージおよびアイシング，点滴などの簡単な医療処置を行える簡易ベッドなどが設置されていた。

③救護所にはアイスバスの設置はなし．簡易ベッドでのアイシングおよび経口補水，経口補水ができないものは点滴処置を 1000ml 施行され，大多数は帰宅，医療機関への搬送が必要な傷病者はいなかった。

④本マラソン大会の救護体制は出場選手（ランナー）への体制であり，沿道の観客やボランティアスタッフ（総じて高齢の方が多い），さらに道路規制のために各道路に配置されている警備員，これらの方への救護体制は行われていない．特

に警官や警備員は道路規制の立場上、その現場を離れることはできず、従来から  
委員会で指摘されているオリンピック時の熱中症対策のピットフォールが存在  
していた。

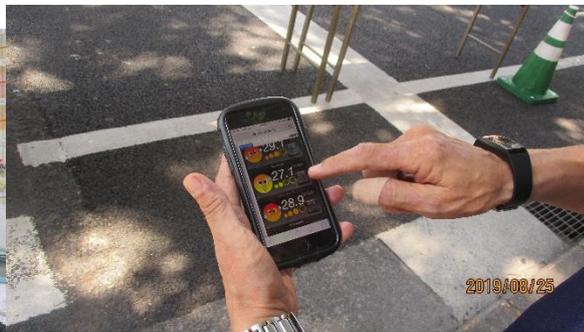
#### ■第 101 回全国高校野球選手権大会（於 甲子園）

視察：矢口有乃 担当理事、島崎淳也 委員、神田潤 委員

略

写真

■ にっぽんど真ん中祭り



■北海道マラソン



救護所及び AED 隊